



# 日本水大賞

JAPAN WATER PRIZE

**水**の惑星—地球を形容するのにこれほど適した言葉はないでしょう。水は自然界を循環し、地球上あらゆる生物の生命を育み、生存を支え、汚染を浄化してきました。特に日本においては古来より美しい水を誇り、私たちはその恩恵に浴してきました。私たちはこの美しい水を次世代の子どもたちに受け継ぐことができるでしょうか……。

平成10年6月、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる21世紀の日本と地球を目指し、水循環の健全化に寄与することを目的として、日本水大賞顕彰制度委員会（委員長 東京大学名誉教授、国連大学上席顧問 高橋 裕氏）が設立され、事務局が公益社団法人日本河川協会内に置かれました。第7回から日本水大賞委員会に名称を変更し、第12回より委員長は日本科学未来館館長で宇宙飛行士であった毛利衛氏となり現在委員13名及び特別委員5名で構成されております。

日本水大賞委員会は、水循環の健全化に寄与する個人、諸団体の地道な研究活動を応募、顕彰し、広く全国に紹介、啓発するための「日本水大賞」を主催し、第1回日本水大賞の表彰式・受賞活動発表会が平成11年3月に秋篠宮同妃両殿下(当時)のご臨席を仰ぎ盛大に開催されました。また秋篠宮皇嗣殿下におかれましては、平成17年5月より日本水大賞委員会名誉総裁にご就任されております。なお、第17回からは国土交通省が主催者として協働しています。

第1回の日本水大賞は大賞の他、大臣賞として建設大臣賞、国務大臣環境庁長官賞（当時）が贈られました。その後第3回（平成13年5月）から厚生労働大臣賞、第6回（平成16年6月）から農林水産大臣賞及び文部科学大臣賞、そして第8回からは経済産業大臣賞が加わり、水環境行政に関わる全ての大臣から贈られるまでになりました。第26回からは、水道行政が厚生労働省から国土交通省に移管されたため、厚生労働大臣を除く5大臣から贈られることとなっています。



また、第4回（平成14年5月）からはスウェーデンで開催される青少年を対象とした権威ある国際コンテスト、ストックホルム青少年水大賞に参加する日本代表の選考を兼ねた日本ストックホルム青少年水大賞（青少年研究活動賞から改称）が設けられました。国際コンテストでは、2004年に沖縄県立宮古農林高等学校が初めてグランプリを獲得し、2020年には青森県立名久井農業高等学校が我が国として2度目のグランプリを獲得しています。

今年で第28回となる日本水大賞には水循環政策本部、外務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省など関係41団体から後援いただくとともに、8社1団体から協賛いただいています。日本における水環境問題を研究活動する全ての個人、団体を対象とした唯一の賞として、多くの活動される方々の励み、目標となり、広く国民に水循環の健全化の重要性を啓発する機会として発展を遂げてきました。

## 対象範囲

### (1) 対象となる活動の内容 (活動分野)

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような分野における諸活動(研究、技術開発を含む)を対象とします。

#### ①水防災:

- ・防災教育、住民避難の円滑化への取組み
- ・水防災に対する安全性の向上に資する技術の開発・普及等

#### ②水資源:

- ・水を大切に取る取組み、山や川などの水源地を大切に取る取組み等

#### ③水環境:

- ・川や湖沼、海などの水をきれいに取る取組み、水辺や水のある地域づくりを行う活動
- ・水にかかわる体験活動、環境学習等
- ・生き物の保護や生物多様性の保全に資する活動(「水循環系の健全化」の視点が含まれるものに限る)

#### ④水文化:

- ・水や川、湖沼や海などに対する敬意と親愛を高める活動
- ・水や川、湖沼や海などの文化を創り、広める活動(芸術、文学を含む)、地域における水文化の発掘や普及等

#### ⑤復興:

- ・上記①から④に該当する活動のうち、地域の復興の視点から実施されるもの
- ※ その他、上記①～⑤に関係する国際的な連携・技術協力・学会活動



### (2) 対象となる活動主体

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような方々が実施する諸活動を対象とします。なお、個人、法人、グループの種別、年齢、職業、性別、国籍等を問いません。

## 日本水大賞の内容

対象となる活動の中から、優れたものに対して、以下の賞を授与し、広く公表します。

#### ①大賞【グランプリ】(賞状・副賞 200 万円)

水循環の健全化を図る上で、活動内容が幅広くかつ社会的貢献度が高く、総合的見地から特に優れたものに対して授与します。

#### ②大臣賞【国土交通大臣賞】【環境大臣賞】【農林水産大臣賞】【文部科学大臣賞】【経済産業大臣賞】(賞状・副賞 50 万円)

各省の行政目的に関係の深いものの中から、特に優れたものに対して授与します。

#### ③市民活動賞【読売新聞社賞】(賞状・副賞 30 万円)

市民活動の中から、特に優れたものに対して授与します。

#### ④国際貢献賞(賞状・副賞 30 万円) (今回は該当なし)

活動の範囲や効果が国際的であり、人・文化・技術の日本との交流も含め、大きな功績をあげていると考えられるものに対して授与します。

#### ⑤審査部会特別賞(賞状・副賞 10 万円)

活動がユニークなものなど、審査部会において特に表彰に値すると判断されたものに授与します。

#### ⑥日本ストックホルム青少年水大賞(賞状・副賞 20 万円及び国際コンテスト参加の渡航、滞在費用)

20 歳以下の高校生または同等の学校に在籍する生徒又はその団体での研究活動から優れたものに対して授与します。その他、審査部会で表彰に値すると判断されたものは、委員会での承認を経て、優秀賞及び審査部会特別賞が授与されます。

第28回日本水大賞 各賞一覧 (応募総数81件)

各賞	活動主体	都道府県	活動の名称	活動主体の名称
大賞	学校	宮城県	青の革命 ～深層元肥による水質改善～	宮城県農業高等学校 環境保全部
国土交通大臣賞	団体	栃木県	イワナの学校：学んで、育てて、ネイチャーポジティブ	ニッコウイワナに学ぶ会
環境大臣賞	学校	大阪府	次世代に紡ぐ里山の未来～飼育部ふぁーむ～	大阪府立枚方高等学校 生物飼育部
農林水産大臣賞	学校	栃木県	那須野が原の二次的自然を守れ ～ミヤコタナゴをシンボル種とした農業振興～	栃木県立那須拓陽高等学校
文部科学大臣賞	学校	愛媛県	愛媛の希少種マツカサガイとヤリタナゴを守りたい ～ 謎多き二枚貝の地域絶滅を防ぐ高校生の取組 ～	愛媛大学附属高等学校 理科部
経済産業大臣賞	企業	福岡県	こども水力発電所in戸豊水 ～小水力発電所と水を中心とした学びの場の形成～	一般社団法人こども水力発電所
市民活動賞	団体	埼玉県	地下水調査とムジナモの野生復帰活動	羽生市ムジナモ保存会
国際貢献賞	団体	東京都	流域治水を活かしたネパール小河川の洪水防災協力	認定NPO法人シャプラニール＝市民による海外協力の会
審査部会特別賞	団体	熊本県	地域産業とともに歩み未来に引き継ぐ地下水保全活動	公益財団法人 くまもと地下水財団
奨励賞	学校	群馬県	小川の未来を考える ～生物多様性を目的とした農村地域振興～	群馬県立藤岡北高等学校 環境工学部
	団体	東京都	首都を貫く荒川をふるさとに！ 国際交流へと発展するあらかわ学会30年	特定非営利活動法人 あらかわ学会
	企業	新潟県	J R信濃川発電所に係る地域共創と 河川環境への取組み活動	東日本旅客鉄道株式会社 エネルギー企画部 信濃川発電所
	団体	新潟県	大毎水道100周年記念誌編集委員会	大毎水道組合
	学校	愛知県	カワバタモロコたちを未来へつなぐ 豊かな水の生態系を守る	岡崎市立東海中学校 自然科学部
	学校	滋賀県	老中生 三方よし ～世間よし 琵琶湖よし みんなよし～	草津市立老上中学校
	学校	大阪府	マイクロファイバー汚染のポリエステル細菌での分解	大阪桐蔭高等学校 理科研究部
	団体	兵庫県	モリアオガエルが教えてくれた私たちの町の未来	西宮市立山口中学校 モリアオガエル保存会
	学校	岡山県	市民は海洋ごみ問題の解決者！ ～シチズンサイエンスによる市民協働の実践～	山陽学園中学校・高等学校 地歴部
	学校	福岡県	ウナギの絶滅を回避する活動から見えてきた 持続可能な未来	福岡県立山門高等学校 Oneヘルスクラブ

## 第28回日本水大賞委員会 委員名簿

名誉総裁 秋篠宮皇嗣殿下		
役職	氏名	所属・職名
委員長	毛利 衛	日本科学未来館 名誉館長
副委員長	甲村 謙友	公益社団法人日本河川協会 会長
委員	赤星 たみこ	漫画家・エッセイスト
委員	浅枝 隆	埼玉大学 名誉教授
委員	上田 真	一般社団法人日本建設業連合会 環境委員長
委員	大垣 眞一郎	東京大学 名誉教授
委員	岡田 光正	公益財団法人 国際エメックスセンター理事長 広島大学 名誉教授
委員	清水 芳久	京都大学 名誉教授
委員	進士 五十八	東京農業大学 名誉教授・元学長
委員	高野 博幸	一般社団法人日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行
委員	滝鼻 太郎	株式会社読売新聞東京本社 執行役員編集局長
委員	名執 芳博	特定非営利活動法人日本国際湿地保全連合 相談役
委員	村田 和夫	株式会社建設技術研究所 相談役
特別委員	水嶋 智	国土交通事務次官
特別委員	上田 康治	環境事務次官
特別委員	渡邊 毅	農林水産事務次官
特別委員	増子 宏	文部科学事務次官
特別委員	藤木 俊光	経済産業事務次官

令和8年1月現在

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【大賞】（副賞 200 万円）

活動主体	宮城県農業高等学校 環境保全部
活動名称	青の革命 ～深層元肥による水質改善～
活動の背景・動機	<p>地元農家から「苗が枯れた」「水面が緑に覆われた」という相談を受け、水質調査を行うと、水田の窒素濃度は環境基準の 4.5 倍、9mg/L という深刻な数値を記した。原因は市販肥料に含まれる速効性窒素の急速な溶出と、緩効性肥料のプラスチック殻による残留と考えられた。すなわち、豊かな実りを支えた農業自体が、水を汚す要因だった。</p> <p>「水を汚す農業から、きれいにする農業へ」という目的を掲げて取り組んだ。</p>
活動の概要	<p>溶けた後に何も残らない窒素肥料「ウレアホルム」に注目し、「窒素の構造・施肥量・施肥位置」の 3 つを見直す新しい施肥法を構築した。</p> <p>速効性とウレアを粉末化して混ぜ合わせ、表面からゆっくり溶け出す“飴玉構造”を試作。堆肥を 2.3%加えることで結着に成功し、リン酸・カリウムも融合した世界初のオールインワン肥料を多木化学と共同開発した。</p> <p>田植え実習中に「肥料を入れ忘れる」という失敗をきっかけに、3 分の 1 の肥料でも収量や食味に差がないことを発見。根が養分を求めて伸びる“ど根生効果”により、溶出量を 62.5%削減した。</p> <p>ヤンマーと連携して地中 10cm に肥料を埋め込む田植機を開発し、3 分の 1 に減らしたウレアを深層施肥した結果、窒素溶出は検出されず、アオミドロの発生も完全に抑制できた。</p> <p>この成果を報告すると、地元農家から「やってみたい」という声上がり、現在は肥料・施肥法・機械の 3 点で特許を出願中。環境負荷の低い新たな農法として、地域から全国へと普及が進んでいる。</p> <p>本研究は、水田由来の窒素流出という見過ごされがちな課題に対し、科学的データに基づいて改善策を提示し、実践と普及を一体化した点に大きな特徴がある。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「水環境の保全」と「農林水産業の振興」に寄与するものであり、日本水大賞又は農林水産大臣賞の候補になると考える。</li> <li>・水田用の窒素肥料を構造・施量・施肥位置の改良探求により水質改善がなされ、マイクロプラスチック汚染にもつながっているこの活動は全国的な普及を期待している。</li> <li>・水田への肥料流出を防ぐため新たな肥料を開発し、さらに、企業との協働で施肥のための田植え機まで開発している。素晴らしい成果である。</li> </ul>

第28回 日本水大賞 活動概要 【国土交通大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	ニッコウイワナに学ぶ会
活動名称	イワナの学校:学んで、育てて、ネイチャーポジティブ
活動の背景・動機	<p>当会は、地域住民にとって今や「見たことのない生き物」となりつつあるニッコウイワナの保全と、川への関心醸成を目的に活動している。国土交通省日光砂防事務所、栃木県日光土木事務所、(国研)水産研究・教育機構、鬼怒川漁業協同組合日光支部、古河日光発電株式会社、日光市森林組合、日光市役所、市内小学校などと連携し、多面的な取り組みを展開してきた。</p>
活動の概要	<p>主な活動として、市内小学校での授業やボランティアイベントを通じた河川清掃、魚類生息環境の改善、資源管理ルールの普及、イワナのふ化観察などがあり、これまでに延べ 2500 名以上が参加している。</p> <p>① 小学生や釣り人に川や魚への関心を高め、乱獲防止と資源管理の重要性を伝えるため、(国研)水産研究・教育機構と協力して、実際に大谷川に生息するニッコウイワナの写真を基にした精巧な模型を制作。体長、雌雄、個体数、模様の個体差を再現したこの教材で資源管理ルール(体長制限等)を学びながら釣り体験を行うプログラムを実施している。</p> <p>② 河川授業では清掃活動を行い、コロナ禍で小学校授業の実施が困難な年には「ペットボトルをリユースしてイワナを知ろう!」をテーマに、自宅で実施可能な「ペットボトルふ化マニュアル」を開発。冷蔵庫で命の誕生を家族と共有できる仕組みを整えた。</p> <p>③ 3 年以上の協議を経て、古河日光発電株式会社の協力で堆積土砂約 1100t を河川流出の恐れのない場所へ運搬した。当会はこの土砂を再利用して巨石を作成し、市内のスギ間伐材と組み合わせて「イワナの隠れ家」を製作。小学校の授業で児童と河川に設置し、②でふ化観察した稚魚を放流した。</p> <p>④ 環境改善授業には、国土交通省日光砂防事務所や栃木県日光土木事務所が講師として参加し、地域の児童を対象に治水の重要性や水難事故の防止策、過去の災害とその教訓について、現場写真や実例を交えてわかりやすく伝えた。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニッコウイワナの保全に行政、学校、市民、企業が取り組み、保全活動に大きな成果を挙げた。自宅の冷蔵庫でのふ化や釣り体験、イワナの隠れや作りに成功するなど、ユニークな活動は他の団体にも参考になる。</li> <li>・一つの生物への着目から広い領域に効果を及ぼす活動ができている点はすばらしい。</li> <li>・土砂をいったん除去し、これをリサイクルした巨石と間伐材の組み合わせて「隠れ家」をつくってイワナの生存率を高めたというエコな取り組みが光った。</li> </ul>

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【環境大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	大阪府立枚方高等学校 生物飼育部
活動名称	次世代に紡ぐ里山の未来 ～飼育部ふぁーむ～
活動の背景・動機	<p>2018 年に「枚方里山の会・穂谷」の方々で行った生物調査において、耕作放棄水田にニホンアカガエルなどの希少な両生類が多く生息していることを目の当たりにし、感動を覚えた。穂谷地区は環境省の「重要里地里山 500」にも指定されており、生物多様性保全上非常に重要な地域であるが、耕作放棄によって里山内にある多くの棚田の乾燥化が進んでいる。この素晴らしい環境を維持したいと考え、2021 年に当時 3 年生の同部卒業生の 1 人を理事長に置き発足した「NPO 法人ひらかた生物飼育部 LABO」や地域の自然保護団体、元区長と連携し、耕作放棄水田をお借りして里山の湿地環境を保全するための里山整備活動を開始した。</p>
活動の概要	<p>2022 年 7 月から毎月 1 回以上計 74 回、高校生のべ約 800 人が耕作放棄水田である「飼育部ふぁーむ」へ赴き、里山の生物多様性を守る活動を自分たちで里山の状態を見ながら作業内容やタイミングを顧問と相談しながら設定し、高校生が主体となって継続している。</p> <p>手掘りの水路を整備し、水を継続して供給することで冬季であっても常に水田・湿地の水位を保ち、両生類や水生昆虫などが生息・繁殖できる環境を保っている。湿地近隣のモウソウチクの伐採やネザサ・セイタカアワダチソウなどを除去することで、クヌギなどの落葉広葉樹や在来種のオギなどが芽吹くなど、里山本来の環境を守っている。</p> <p>里山の魅力や生物多様性保全の大切さを伝えるため、地域のイベントにて生体展示を行うなど、地域での環境教育を活発に行っている。2025 年 7 月には大阪・関西万博にて、英語での現地解説や英語の生物説明パネルを用いた海外の方向けの生物展示も行い、里山の保全の大切さを伝えることができた。</p> <p>枚方市を通る一級河川である天野川にて生物調査とゴミの回収を行い、川の生態系に関する自作の啓発動画を作り、駅前の商業施設と協力した大型電光掲示板に放映することでよりたくさんの人々に生物多様性保全の重要性について知ってもらえるよう努めている。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生物飼育、研究活動、耕作放棄地の整備活動、小中学生とのフィールドワーク探究活動の支援などを通して生物多様性の成果をあげている。</li> <li>・専門家の指導も受けつつ里山の生物多様性を守る具体的活動を行っており、その成果の広報活動や環境教育の活動も実施している。</li> <li>・耕作放棄地は全国的にも問題となっており、さきがけの活動になるだろう。</li> </ul>

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【農林水産大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	栃木県立那須拓陽高等学校
活動名称	那須野が原の二次的自然を守れ ～ミヤコタナゴをシンボル種とした農業振興～
活動の背景・動機	<p>本校には、普通科と農業系の農業経営科、生物工学科、食品化学科、家庭系の食物文化科の5つの学科が設置されている。各学科の特性を生かした教育活動を展開するとともに、「調和と共生」を謳い、学科の枠を越えて連携協力し、広い視野を身につけるための教育活動を実践している。</p> <p>天然記念物であるオシャラクブナ(ミヤコタナゴの地方名)は、農業や地域の発展に伴い居場所をなくし、絶滅の危機にある。同種をシンボル種として、那須地域の農業環境を改善させながら地域振興を図ることができる人材を育てることを目的とした。</p>
活動の概要	<p>活動は主に農業経営科 3 年作物専攻生が課題研究として行っている。作物専攻生は年度によって変動はあるが、年度当たり 10～15 名で他学科からの有志参加者もある。令和 5 年に「那須塩原市協働のまちづくり支援事業」に応募・採択され、校内の活動を地域に広めるきっかけとなった。令和 6 年には那須塩原市生物多様性地域戦略の重点項目に選定され、同市と協働で作業を行っている。</p> <p>1. 水環境</p> <p>1)天然記念物ミヤコタナゴ保護区の保全活動 →保護区の泥上げや生物調査に協力</p> <p>2)学校農場内に新設した農業用水路におけるマツカサガイ(ミヤコタナゴの産卵母貝)の繁殖試験→水路内に導入したマツカサガイの繁殖試験。</p> <p>2. 水資源</p> <p>1)農業に関する二次的な自然の保全 →那須地域の農業用ため池の清掃・外来種駆除。</p> <p>2)水源涵養林への植樹活動</p> <p>3. 水文化</p> <p>1)那須扇状地についての学習→扇状地特有の水利・歴史を学ぶ。</p> <p>2)那須農業高校地学部の活動(昭和 30 年代) →水源探査活動の方法や成果について学ぶ。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長年の活動の継続と熱心な取り組みは高く評価したい。</li> <li>・ミヤコタナゴ保護保全をシンボルにしてその水環境・水資源・水文化のそれぞれの関係機関などを巻き込んだ観点からの保護保全の活動の取組は、生物多様性の地域戦略に活用されるなど素晴らしい。</li> <li>・最終目標であるミヤコタナゴの野生復帰を目指し、10 年以上にわたって水路を改良し、産卵場所となる淡水二枚貝の繁殖に成功した点を高く評価したい。</li> </ul>

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【文部科学大臣賞】(副賞 50 万円)

活動主体	愛媛大学附属高等学校 理科部
活動名称	愛媛の希少種マツカサガイとヤリタナゴを守りたい ～ 謎多き二枚貝の地域絶滅を防ぐ高校生の取組 ～
活動の背景・動機	<p>2017 年の年末、地域で緊急性の高い絶滅危惧種を調べた結果、20 年前までは広く分布していたマツカサガイとヤリタナゴが、近年急激に生息地と生息個体数を減らしていることを知った。</p> <p>愛媛県内に残されたマツカサガイの生息地は、いくつかのため池と農業用水路であり、その生息範囲が縮まることがないように、また、個体数が減少しないように維持する必要がある。</p>
活動の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業用水路では、田植え前の一斉清掃の影響で、そこに生息するマツカサガイの約 25% が除去・死亡していることを明らかにした。部員が毎年各地の水路清掃に出向き、清掃後除去された個体を水路に戻している。</li> <li>・不可能とされてきた水槽飼育に8年間挑戦し、当初3ヶ月程度だった維持期間を1年以上へ延長することに成功した。</li> <li>・従来の研究者が困難としてきた長期個体識別の課題(殻への記入消失・削損死・ラベル脱落等)を解決する方法を開発し、寿命が 20 年以上とされるマツカサガイの生息地間および飼育条件下で実験での個体比較が可能になった。</li> <li>・マツカサガイを県民が知らない現状を踏まえ、その生態をわかりやすく解説した漫画を作成・配布して啓発活動を行っている。</li> <li>・水槽実験の結果、コイが小型マツカサガイを捕食・破壊していることだけでなく、大型個体を掘り出して流失させている可能性をはじめ明らかにした。</li> <li>・在来種ヤリタナゴが減少する一方で、国内外来種アブラボテが増加している。これはアブラボテが繁殖期にマツカサガイを独占し、ヤリタナゴをマツカサガイに近づけさせないことが一因であることを水槽実験によりはじめて解明した。</li> <li>・2023 年度には、新たなマツカサガイ生息地の創出を目的として、1年間にわたり候補地調査を行い、2024 年度の調査で、同地でマツカサガイが繁殖できていることを確認した。</li> <li>・2025 年度には、マツカサガイの幼生の宿主となる魚類が生息しやすい環境づくりの方法を考案し、その効果を確認した。</li> </ul>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水位低下時の一時退避による個体の保全、水槽飼育での生息維持期間の向上や長期間にわたって個体を識別できる手法の開発など、優れたポイントが多くみられた。</li> <li>・科学的背景をもって特に母貝の再生産について研究し、生息地の実態をコイの捕食など比較調査されている。それらを踏まえた貝の人工増殖の試みは、大いに生物学として期待できる。この不可原因を明示し、増殖確立ができればストックホルム大会へ推薦したいところ。</li> </ul>

第28回 日本水大賞 活動概要 【経済産業大臣賞】(副賞 50万円)

活動主体	一般社団法人こども水力発電所
活動名称	こども水力発電所 in 戸豊水 ～小水力発電所と水を中心とした学びの場の形成～
活動の背景・動機	水力発電を事業化するまでのプロセスには土木や電気技術、地域の歴史や産業、生き物、お金や経営のことなど様々な学びを得ることができる。このような事業にこどもや若者も、未来の地域を作る一員として、事業に携われる仕組みを作りたい。そんな思いから「(一社)こども水力発電所」という組織を立ち上げ、水力発電所の開発・運営を通して電力をつくり、事業プロセスで発生する「学び」を広く社会に共有しながら、水力発電から生まれる収益をもとにして未来の社会づくりへ貢献しようとするものである。
活動の概要	<p>【こども水力発電所 in 戸豊水(とりゅうず)】</p> <p>熊本県菊池市に流れる1級河川菊池川から取水する「古川兵戸井手(ふるかわひょうどいで)」という農業用水路は、「世界かんがい施設遺産」にも認定されている歴史ある水路である。こども発電所 in 戸豊水は、その古川兵戸井手の「余り水」を活用する小水力発電所であり、2020年7月に調査を開始し、地域との合意形成、現地での調査・設計・建設を経て、2025年1月に完成した。</p> <p>≪発電所概要≫</p> <p>最大出力 49.9kW    最大取水量 0.17 m<sup>3</sup>/秒  有効落差(発電に使える落差) 46.6m  年間発電量 約 276,400kWh/年  (4人家族50世帯分の1年間の電気使用量と同じくらい)</p> <p>【学びの場「戸豊水こどもガーデン」・水を中心とした学びの場の創出】</p> <p>発電所のある敷地には元々空き家があり、地権者や集落の同意を得てこの空き家を解体し、「戸豊水こどもガーデン」というオープンスペースとして整備した。戸豊水こどもガーデンでは、水力発電所の視察会を実施したり、ガーデン内にある「雨庭」でガーデンワークショップを実施したり、水を中心とした学びの場として活用し、水資源の活用や重要性について広める活動をしている。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小水力発電事業の立ち上げを通じて、それに関わる学びを広く社会に提供している。</li> <li>・子ども水力発電所としての活動はまだ1年ではあるが、地域集落の農業用水路を活用した小規模の発電所で再生可能エネルギーをつくっていく、また、その作成プロセスも共有しながら、地域で環境教育、社会教育としての教材としても活用されている。</li> <li>・子どもたちの水への学びの場として「戸豊水こどもガーデン」を整備し、雨庭で治水のことも学べる取組をしていることが非常に面白い。</li> </ul>

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【市民活動賞】(副賞 30 万円)

活動主体	羽生市ムジナモ保存会
活動名称	地下水調査とムジナモの野生復帰活動
活動の背景・動機	<p>貴重なムジナモが生育していることから宝蔵寺沼ムジナモ自生地は国の天然記念物に指定されている。ムジナモが絶滅すると国の天然記念物は指定解除されることから、それを防ぐためムジナモの保護活動に取り組んだ。野生絶滅したムジナモの野生復帰は埼玉県では例がなく全国的にも非常に珍しいことである。今後も湿地帯を守り次の世代に今の環境を残す事が重要なことと考え活動している。</p>
活動の概要	<p>昭和 41 年 5 月に「宝蔵寺沼ムジナモ自生地」は国の天然記念物に指定をされたが、昭和30年代から除草剤が使用され、ムジナモを初め水生植物は激減してし、加えて、大洪水が発生するとムジナモは殆ど流出したことで、ムジナモは絶滅してしまった。そこでムジナモの野生復帰を図り、昭和58年10月羽生市ムジナモ保存会が設立された。会員は昭和59年から自宅水槽で育てたムジナモを自生地に放流を始めたが、夏の間は生育出来るものの年間を通しての生育は出来ないまま平成17年までの22年間が過ぎてしまった。その後「多様な植物や生物がバランス良く成育出来る環境」を目指して浅瀬の造成や、植食性外来動物の駆除を継続した結果、ムジナモは自生地の沼底で越冬して夏に増殖し年間をとおして生育出来るようになった。</p> <p>会員は134名で次の活動を行っています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大型魚やオタマジャクシの駆除 ムジナモを捕食するオタマジャクシの駆除を毎年行ってきた。オタマジャクシを駆除した事によりムジナモは増殖に転じ自生出来るようになった。</li> <li>2. 洪水対策 総雨が100mmを越すと水路からムジナモは流れ出ることから、1株ずつ救出し水路に戻っていた。水路を浅く掘るなど多くの植物と生き物が共存出来るように配慮した環境対策を行った結果、ムジナモはマコモや他の水生植物にからまり流されなくなった。</li> <li>3. 地下水復活の調査 植物や生き物が共存出来る環境が整って来たのは地下水の復活したことが一つの要因と考えられることから、令和3年より地下水の調査を行っている。</li> </ol>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般市民の活動でありながら絶滅危惧種を復活させた長年の活動を評価したい。今後専門家との連携も期待したい。</li> <li>・天然記念物の保全について長く地道な活動を続けられたことは意義深い。</li> <li>・天敵であるオタマジャクシの駆除、水路を浅く掘るなどの洪水対策などの地道な積み重ねが奏功したほか、水温が低いわき水がムジナモの成育に適していることを調査で明らかにし、野生復帰を達成し、かつ自生まで可能になった点を高く評価する。</li> </ul>

第 28 回 日本水大賞 活動概要 【国際貢献賞】(副賞 30 万円)

活 動 主 体	認定 NPO 法人シャプラニール＝市民による海外協力の会
活 動 名 称	流域治水を活かしたネパール小河川の洪水防災協力
活動の背景・動機	世界最貧国の1つであるネパールは、河川洪水のリスクが高いものの、行政および地域住民の洪水対策、事前の備えは進んでいない。行われている対策はスポット的な応急処置にとどまっている。そのため、人々は被災により一段と貧しい状況に追い込まれている。本活動では、ネパール南部の平野部の洪水常襲地域の小河川流域で流域治水の考えの下、洪水リスクを軽減し人々の命と暮らしを守ることを目指して活動を行っている。
活 動 の 概 要	<p>(1)地域住民の防災力強化</p> <p>河川の流域内で集落ごとにコミュニティ災害管理委員会を結成し、毎月会議を開催して、世帯で行う洪水の備え(非常持ち出し袋、避難路確認等)の意識啓発といった自助の促進を行った。また、集落内の避難時の要配慮者(妊産婦、高齢者、障害者)の確認や、雨量や河川の水位の情報を伝達する連絡網の整備と利用といった共助の促進をした。また、流域治水の考え方を「One River, One Community」というスローガンのもと意識啓発し、川全体の洪水メカニズムと必要な対策を住民、行政ら全体で行う必要性の理解を促進した。</p> <p>(2)地方行政の防災力強化</p> <p>地方行政の防災の活動推進の役割を担う、市と区(市は 9 つの区で構成)の災害管理委員会の結成を働きかけた。結成後は、毎月の定期会議の開催支援や、委員会の役割、活動内容の指導、ハザードマップや市、区の防災計画作成、防災訓練実施の支援等を行った。</p> <p>(3)地域住民と地方行政の連携強化</p> <p>コミュニティ災害管理委員会に集まる集落ごとの洪水防災に関する情報や提案を区災害管理委員会が吸い上げ、市の災害管理委員会へ提案することで市の防災の取組に反映させるよう働きかけた。</p> <p>(4)河川対策(インフラ)</p> <p>どの河川も流量に対して川幅が足らなかったため川幅の拡幅を行った。また、各河川の特徴に合わせて、両岸の土堤、水衝部の蛇籠の付帯護岸や水制工、上流部の蛇籠の砂防ダム設置などを行った。活動終了後に移譲する市と地域住民が維持管理できるよう、現地で調達可能な価格、資材によるインフラとし、また軽微な損傷を地域住民が修繕できるよう維持管理研修を行った。</p>
評 価 ポ イ ン ト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPOが水防災の活動を行う上で最も効果的に行えることは、防災教育である。今後の計画に記されている子供の巻き込みは効果的である。今後の成果が期待される。</li> <li>・日本で進みつつある流域治水をネパールに輸出し、洪水メカニズムの把握や防災活動の促進、住民と行政の連携など地域の課題解決に貢献している。</li> </ul>

【第 28 回 日本水大賞 活動概要 審査部会特別賞】(副賞10 万円)

活動主体	公益財団法人くまもと地下水財団
活動名称	地域産業とともに歩み未来に引き継ぐ地下水保全活動
活動の背景・動機	熊本地域では、一部地域での地下水位の低下や、代表的な湧水群である水前寺・江津湖の湧水量の減少等が見られるようになった。地下水は、地下に賦存しており実際には目に見えないものであり、水循環という大きな自然の営みの一部を総合的に管理できるのかという課題がある。このため、(1)人工涵養による地下水量の確保、(2)地下水の現状把握と「見える化」が求められてきた。
活動の概要	<p>(1)地下水の人工涵養対策</p> <p>地下水涵養効果が高いとされる地下水脈上流端、阿蘇外輪西麓の台地部周辺における「冬期湛水事業」の強化に取り組んでいる。2012 年に益城町津森地区 4.5ha(推定涵養量約 32 万<math>\text{m}^3</math>)において冬期湛水事業を開始し、2023 年までに 4 町 1 村の 9 地区 50.5ha(推定涵養量約 400 万<math>\text{m}^3</math>)まで拡大してきた。2024 年は、一気に、熊本地域内 6 市町村 11 地区 65.8ha(推定涵養量約 627 万<math>\text{m}^3</math>)まで拡大し台地部水田湛水事業の目標涵養量 570 万<math>\text{m}^3</math>を達成した。これにより、一部の観測井においては、低下傾向にあった地下水位が回復傾向になっていることが確認された。</p> <p>(2)地下水の「見える化」</p> <p>熊本地域においては、1980 年代から継続的な地下水調査が実施され、地下水位観測井は 100 カ所を超える。当財団で所有者ごとのデータを一元的にとりまとめデータベース化による発信、有識者と密に連携した科学的調査研究を通じて、「地下水の見える化」や「涵養能力の高い地区の選定」等の取り組みを実施してきた。インターネット上で誰もがすぐに地下水位等を確認できるようになっており、地域住民の不安の解消の一助となっている</p> <p>(3)情報発信</p> <p>よりわかりやすくした地下水情報について、地域住民を対象としたシンポジウム(毎年約 100 名参加)や勉強会(毎年約 50 名参加)を実施している。地下水保全に積極的に参画したい企業及び地域住民のために、水田オーナー制度やウォーターオフセットによる住民参加型の仕組みも構築した。水田の涵養機能を把握し、参画した企業や地域住民へ地下水涵養量証明書を発行し、また、節水の呼びかけ等の協力要請も行いながら地下水保全意識を高めている。</p>
評価ポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>地下水保全のために、複数の自治体が連携、協働して設立された財団の活動は、水資源・水環境、水文化・水防災、それぞれの観点から地域を支える成果をあげている。特に地下水涵養効果を高める登記涵水事業は科学的な調査研究がなされ論文としても高い評価をあげている。</li> <li>地下水の枯渇を契機として、人工湛水の実施や住民への啓発活動等、多様な活動を広域で実施している点を高く評価。</li> </ul>